

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

『平家物語』における平重盛像：
「孝」と「忠」を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學大学院文学研究科 公開日: 2023-02-07 キーワード: 『平家物語』, 平重盛像, 孝, 忠, «平家物語», 平重盛形象 作成者: 于, 君 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001607

『平家物語』における平重盛像

—「孝」と「忠」を中心に—

The Image of Taira no Shigemori in *Heike Monogatari*:

Focusing on “Filial piety” and “Loyalty”

于 君

キーワード：『平家物語』 平重盛像 孝 忠

关键词：《平家物語》 平重盛形象 孝 忠

要旨

歴史の実態としての平重盛はともかく、「文章うるはしうして、心に忠を存じ、才芸すぐれて、詞に徳を兼ね給へり」とあるように、平重盛は『平家物語』の中で大変好意的に描かれている存在である。そして、一つ特徴的なのは、平重盛を描く場面において、「孝」と「忠」という二つの言葉が多く出現することである。特に「殿下乗合」事件後と、「鹿谷」陰謀事件が発覚してからの場面で「孝」と「忠」が多く語られている。本稿では、まず「孝」と「忠」という二つの概念を整理した上で、平重盛について語る場面を中心に、「孝」と「忠」が物語における意味及び、両者の関係について考察する。その次に、平重盛と対照化させるため、「孝」と「忠」で語られたその他の武士や人物についても検討する。このような検討過程を経て、『平家物語』にどのような平重盛像が描き出されたのかについて考えてみる。

摘要

作为历史实像的平重盛暂且不论，正如《平家物語》里所记载的“品行端正，心存忠贞，多才多艺，能言善辩，兼具德望”这一句可以看出，他在《平家物語》里是被极其美化的一个存在。另外有一点不容忽视，在刻画平重盛的时候，“孝”和“忠”这两个词出现频繁。特别是在“殿下乗合”事件发生后，以及“鹿谷”阴谋事件被发现后，“孝”和“忠”被多次提及。本文，在对“孝”和“忠”这两个概念做出整理后，以描绘平重盛的场面为中心，考察“孝”和“忠”在物语中的含义及其二者的关系。其次，为了同平重盛进行对比，也会结合一些用“孝”和“忠”所刻画的其他武士或人物进行考察。本文将通过这样的研究过程，来探求《平家物語》中所描绘的平重盛形象。

はじめに

「文章うるはしうして、心に忠を存じ、才芸すぐれて、詞に徳を兼ね給へり」⁽¹⁾とあるように、平重盛は『平家物語』の中で大変好意的に描かれている。しかし、次男の平資盛が藤原基房の従者に恥辱を受けたのを遺恨とする重盛が、武者に命じて基房一行に報復したという殿下乗合事件の真相⁽²⁾から、実際の重盛には「深クネタク思」(『愚管抄』巻五)う性癖があったとされる⁽³⁾。このように、歴史の実態としての重盛は必ずしも『平家物語』が描いた重盛の人物像と合致しないにも関わらず、「忠臣」としての重盛像は、『平家物語』の記述を起点とし、長い間不動のものとして、人々の脳裏に深く根付いている。例えば、『平家物語』の記述は、江戸時代の『日本外史』の編纂依拠の一つともなることが有名である⁽⁴⁾。

本稿では、歴史の実態としての重盛を念頭に置きながら、『平家物語』というテクストに戻り、「孝」と「忠」という二つの言葉で重盛を語る場面を中心に、『平家物語』に描かれた重盛像を再度考察する。

『平家物語』の中で、平重盛が登場してから、「孝」と「忠」の言葉が多出する。これは平重盛像の形成との関係について、後文で詳しく論じる。ここでは、まず「孝」と「忠」という二つの概念について整理する。

「孝」と「忠」は一般に、儒教の概念として知られている。伝統的儒教では「孝」について、(一)祖先の祭祀(招魂儀礼)、(二)父母への敬愛、(三)子孫を生むことの三行為をひっくるめての内容であると、加地伸行が定義している⁽⁵⁾。他方、儒教の「忠」は、忠信という語に示されるような心のありかた一般を指す場合と、君臣関係において臣から君へのあり方として限定的に言われる場合の二つがあることが指摘される⁽⁶⁾。「孝」と「忠」は、儒教倫理の二大徳目だったと言えよう。

(1) 『平家物語』本文の引用は、市古貞次校註・訳『平家物語』(①)(新編日本古典文学全集所収)、小学館、1994年、231頁による。

(2) 『平家物語』の中では、これを平重盛の父である平清盛の仕業とする。

(3) 平野邦雄・瀬野精一郎編『日本古代中世人名辞典』(吉川弘文館、2006年)に、「平重盛」の項を参照、589頁。

(4) 『日本外史』は『平家物語』の重盛に対する記述をふまえ、重盛は「忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず」(頼山陽著、頼成一・頼惟勤訳『日本外史』上、岩波書店、1976年改訳版)と嘆いた、と書いた。

(5) 加地伸行『儒教とは何か』中公新書、1990年、19頁、参照。

(6) 子安宣邦監修『日本思想史辞典』ベリかん社、2001年、佐久間正の「忠孝論」、355頁、参照。

ところで、「孝」と「忠」は日本において、特に近代以降、「忠孝論」というひとつくりにした言い方で論じられることが多い。「忠孝論」は、特に徳川時代に入ってから、君臣関係を巡って盛んに議論が行なわれるようになり、そこでは臣下の主君への絶対的恭順が多く説かれた。特に江戸末期に至ると、後期水戸学などが代表するように、「忠」と「孝」の矛盾相剋を撥無し、「忠孝無二・忠孝一致・忠孝一如・忠孝一本」を強調しつつ、実質的には「孝」に対する「忠」の優位を主張するものが多くなった。そしてさらに明治に入ると、近代天皇制国家の形成に応じて、主君に対する「忠」が天皇に対するそれに転換されたのであった⁽⁷⁾。

一方中国では、「忠」と「孝」の矛盾相剋が想定される場合、原理的にはあくまで「孝」が「忠」に優先するとするのが一般的であった。特に、儒教の根本經典の一つである『孝経』に見られる「孝」は、父子に限らず全人倫を律するものとして、さらには人倫を超えた宇宙的な原理ないし理念として、重視されてきた⁽⁸⁾。「孝」は、中国社会、国家において伝統的に重要な倫理として機能してきたのである。そして、さらに考慮しなければならないのは、儒教の「孝」以外に、仏教も大いに「孝」を説いてきたことである。歴史的に儒教と妥協し、調和する中で、仏教独自の「孝」の観念もまた形成されたからである⁽⁹⁾。

日本においては、儒教經典の日本伝来に伴い、「孝」に対する認識も、主に天皇を中心とした貴族社会に浸透していった。趙秀全は、『日本書紀』『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』等の歴史書と『源氏物語』における天皇の「孝」の用例を検証し、「有徳（筆者注：「孝」の徳）為君」という中国風の仁政思想が政治的意図で加えられた、奈良時代から平安中期に至る「孝」の受容相を紹介している⁽¹⁰⁾。その日本に伝来した「孝」も、儒教の「孝」そのものではなく⁽¹¹⁾、中国の三教一致思想

(7) 前掲『日本思想史辞典』、355頁、参照。

(8) 前掲『日本思想史辞典』、355頁、参照。

(9) 道端良秀『仏教と儒教倫理—中国仏教における孝の問題』（平楽寺書店、1968年）参照。道端は同書の中で、仏教倫理の「孝」として、「出家」と「報恩」などを挙げている。しかし、「出家」は儒教からすれば、全く不孝な行為であった。仏教の説く「孝」と儒教倫理としての「孝」の違いが、同書の中に詳しく論じられている。

(10) 趙秀全「古代天皇における孝徳—歴史書と物語文学を通じて」（『アジア遊学』一五一号（東アジアの王権と宗教）勉誠出版、2012年、92-103頁）。

(11) 浄土宗の僧、聖岡は、中国仏教以来の儒仏一致の伝統を受けながら、儒教と仏教との差異を提示し、特に浄土宗における孝道を、それまでに解釈された人為的な道徳観念の域を超えた古よりの自然の法である、と位置付けた（鈴木英之『中世学僧と神道—了誉聖岡の学問と思想』勉誠出版、2012年、参照）。

の影響を受けて、当時の律令国家という体制内で変容していったのである。例えば、奈良時代に唐から渡来した僧、法進は『威儀経』に中国固有の忠孝観、あるいは礼教概念を盛り込み、その普及・実践を通じて唐代の理想的な護国仏教の実践を目指したとされる⁽¹²⁾。つまり、僧侶によって日本にもたらされた仏教の「孝」は、儒教の「孝」と混合しながら、当時の日本の上層部において、政治体制の維持や国家作りの道具、知識として利用された部分も大きかったのである。そのため、こうした多様な姿で日本に持ち込まれた「孝」が、どこまで当時の社会全体に広まっていったのかも、正確には分からない。では、こうした思想潮流の中で、「孝」と「忠」はどのようなかたちで『平家物語』の人々の中に生きていたのか。次から、『平家物語』におけるその姿を、平重盛について語る場面を中心に検討してみよう。

1 平重盛における「孝」と「忠」

『平家物語』中、明確に「孝」と「忠」という言葉が武士に関して現れるのは、平重盛の場面においてである。特に「殿下乗合」事件後と、「鹿谷」陰謀事件が発覚してからの場面で「孝」と「忠」が多く語られている。そこでまず、この二場面を中心に、重盛に関わる議論を検討し、「孝」と「忠」の意味及び、両者の関係について考えてみることにしたい。

1.1 「殿下乗合」事件後の重盛

平重盛の息子、平資盛が摂政殿のおでましに際し無礼を為し、馬から落とされた事に対し、平清盛が重盛に相談することなく、片田舎の武士を集めて摂政殿一行に恥をかかせた。それを知った重盛が、参加した武士たちと息子を厳しく咎める場面に、「不孝」という言葉が出てくる。

「たとひ入道いかなる不思議を下知し給ふとも、など重盛に夢をばみせざりけるぞ。凡そは資盛奇怪なり。梅檀は二葉よりかうばしとこそ見えたれ。既

(12) 富樫進『奈良仏教と古代社会—鑑真門流を中心に—』東北大学出版会、2012年、67-89頁、参照。

に十二三にならむずる者が、今は礼儀を存知してこそふるまふべきに、か様に尾籠を現じて入道の悪名をたつ。不孝のいたり、汝独りにあり」とて、暫く伊勢国におひ下さる。⁽¹³⁾

こう武士たちと息子を厳しく咎めた重盛の態度は、『平家物語』で「されば此大将をば、君も臣も御感ありけるとぞきこえし」と評されている。重盛から見れば、入道相国清盛の悪い評判を立てることが「不孝のいたり」なのである。ここから逆に、「家」に良い評判をもたらし、あるいは功名を立てることは「孝」と意識されていたことがうかがわれる。

平清盛の「悪行」の結果、いろいろ凶事が出来する。神祇官や陰陽師は、百日の間に、天下の大事があると占った（巻第三「魘」）。そのことを聞いた重盛は大変心細く思い、熊野へ参詣に出る。以下は、本宮証誠殿の前で一晩中神に訴えた重盛の話である。

親父入道相国の体をみるに、悪逆無道にして、ややもすれば君をなやまし奉る。重盛長子として、頻りに諫をいたすといへども、身不肖の間、かれもッて服膺せず。そのふるまひをみるに、一期の栄花猶あやふし。枝葉連続して、親を躪し、名を揚げん事かたし。此時に当つて、重盛いやしうも思へり。なまじひに列して、世に浮沈せん事、敢へて良臣孝子の法にあらず。⁽¹⁴⁾

父平清盛の目に余る悪行を心配しつつ、それを止められない自身の非力を嘆く重盛の心情が叙述されている。重盛は、清盛の「君をなやまし奉る」不忠な行いがあると、子孫が親に打ち続くこととなり代々親の名を後世に残し続けることが困難になると考えている。また、無理やりに身に余る重臣に列して、世を不安定にさせることも、「良臣孝子」の道ではないと述べている。

では、重盛の考える「良臣孝子」とはいかなるものか。まずその「孝」について見れば、重盛の発言「親を躪し、名を揚げん事」は、『平家物語』の注釈者も指摘する通り、「立身行道、揚名於後世、以躪父母、孝之終也」⁽¹⁵⁾ という儒教倫理の

(13) 前掲『平家物語』(①)、66頁。

(14) 前掲『平家物語』(①) 226-227頁。

(15) 加地伸行全訳注『孝経』（「開宗明義章 第一」）講談社学術文庫、2010年、26頁。

「孝」に共通するだろう。我が身を以て正しいことを行い、自ら名を後世に残すことが父母を顕彰することとなり、それこそが「孝」の究極の目的という意味である。ここでは、「孝」は「名を揚げて、父母を顕彰する」ものとして示されている。そしてこの「孝」の実践に際して、彼は「枝葉連続して」とも強調する。「子孫を生む」こと（子孫繁栄）＝「孝」とする儒教倫理からすれば、重盛における「孝」は、父清盛に対してだけではなく、平家一門の祖先に対する「孝」でもあった。ここに見られる「孝」は、儒教倫理としての「孝」の意味が強いものであると言えよう。

では「良臣」はどのようなものなのか。「なまじひに列して、世に浮沈せん事、敢へて良臣孝子の法にあらず」という重盛の言い分から逆転して考えれば、身分相応の官職に就き、世間を安定させる人、君にも民にも貢献する人こそが「良臣」であると言える。

すなわち、重盛における「孝」と「忠」は、「天下（君と臣の両方）において臣としての役目をきちんと果たせば（忠の考え）、一族において孝ともなり、一族における孝が、天下に対する忠にも繋がる」という関係にあるものと整理することが可能だろう。

1.2 「鹿谷」陰謀事件発覚後の重盛

前段で述べた重盛の「孝」と「忠」は、摂政家・息子資盛・父清盛及び「家」・国の「臣」としての自分自身、という人間関係に見られる本来的なあり方であり、「孝」と「忠」は相関するものであって、そこには矛盾は存しない。ではその後、専制政治を目指す主君、後白河院と、横暴な独裁者、父清盛との軋轢の狭間に重盛が立たされた際、彼はどのような決断をしたのだろうか。

鹿谷の平家打倒計画発覚の後（巻第二「西光被斬」）、清盛は後白河院を軟禁しようとする。これを知った重盛は、清盛のいる西八条邸へ駆けつけ、武装した父清盛をいさめようとする。

（前略）太政大臣の官に至る人の、甲冑をよろふ事、礼義を背くにあらずや。就中御出家の御身なり。夫三世の諸仏、解脱幢相の法衣をぬぎ捨てて、忽ちに甲冑をよろひ、弓箭を帯しましまさむ事、内には既に破戒無慙の罪をまねくのみならず、外には又、仁義礼智信の法にもそむき候ひなんず、かたへ恐ある申事にて候へども、心の底に旨趣を残すべきにあらず。まづ世に四恩

候、天地の恩、国王の恩、父母の恩、衆生の恩、是なり。其なかに尤も重きは朝恩なり（……）なかにも此一門は、代々の朝敵を平げて、四海の逆浪をしづむる事は、無双の忠なれども、其賞に誇る事は、傍若無人とも申しつべし（……）君と臣とならぶるに、親疎わくかたなし。道理と僻事をならべんに、急でか道理につかざるべき。⁽¹⁶⁾

重盛は、儒教と仏教、古今東西の知識を用いて清盛を長々といさめるのだが、彼が伝えたい究極のことは、「君と臣とならぶるに、親疎わくかたなし。道理と僻事をならべんに、急でか道理につかざるべき」という最後の一句に尽きている。後白河院を軟禁するのは臣としての「不忠」の行為であり、臣は君（後白河院）に従うのが道理なのである。しかし、後白河院に対し忠臣としてふるまおうとすれば、父清盛に対する「孝」を貫くことが出来ない。

悲しき哉君の御ために、奉公の忠をいたさんとすれば、迷廬八万の頂より猶たかき、父の恩忽ちに忘れんとす。痛ましき哉不孝の罪をのがれんと思へば、君の御ために既に不忠の逆臣となりぬべし。進退惟谷れり。是非いかにも弁へがたし。申しうくるところ詮はただ重盛が頸を召され候へ。さ候はば、院中をも守護し参らすべからず、院参の御供をも仕るべからず。⁽¹⁷⁾

ここには苦悩する重盛の様子が描かれている。主君後白河院と父清盛との板挟みになった重盛は、奉公の「忠」を果たそうとすれば、父の高い恩を忘れる「不孝」の罪を得、不孝の罪を逃れようとすれば、「不忠」の逆臣になると言う。後白河院に対する「忠」と、父清盛に対する「孝」のどちらを選ぶか、重盛は大いに困むのである。傍線部に見られるように、重盛は自分の頸を取る（自ら死ぬ）ことで、「忠」と「孝」の両方を両立させようとするのである。このように、「忠」と「孝」が大きく矛盾する場面で、重盛は自己犠牲の決断をせざるを得ないのである。

主君と父との板挟みになり自らの頸を取ってくれと訴えるこの場面からは、多くのことを読み取ることができる。「しかれば院中に参りこもり候べし。其儀に

(16) 前掲『平家物語』(①)、135-137頁。

(17) 前掲『平家物語』(①)、137-138頁。

て候はば、重盛が身にかはり、命にかはらんと契りたる侍共、少々候らん。これらを召しぐして、院御所法住寺殿を守護し参らせ候はば」(巻第二「烽火之沙汰」と重盛は言いつつ、「さすが以ての外の御大事でこそ候はんずらめ」と付け加える。重盛は自己犠牲の決断をすることにより、父清盛と武力を以て真正面から衝突することも、父を拘束することも回避することができる。一方、重盛は生きている間に、清盛による法皇への軟禁を止めることが出来たので、法皇への「忠」も一旦果たしたと言えるのである。しかし、重盛の死後わずか三か月後、清盛は法皇の幽閉を強行する(巻第三「法皇被流」)。そして重盛も生前にこのことをすでに察知していたのである。にもかかわらず、父に正面からぶつかることなく、ただただ一族と自分の救済を神仏に委ねたのである⁽¹⁸⁾。父清盛の法皇への軟禁を本当に止めさせる決意があれば、軍を集め後白河法皇を守るか父清盛を拘束するのが得策であったであろう。そうしてこそ、主君である後白河法皇に対する真の「忠」となる。しかし、彼はそのような行動は取らなかった。ここからは、あくまでも父清盛への「孝」を優先させた重盛の姿が鮮明に浮かび上がってくる。

重盛の父清盛に対する態度について、前掲『仏教と儒教倫理—中国仏教における孝の問題』の中で道端良秀は、儒教倫理の「孝」に拠りつつ、次のように述べている。

親と子の関係は、絶対者と服従者、尊と卑との、上下の倫理的関係にあった。「儀礼」の喪服伝に、「父は子の天なり」とあることは、父をもって絶対的な専制君主と同じということ、親子の関係は、天子と臣下との関係と同じで、親は子に対して、無条件的服従を強要することができ、子は天子たる親に、絶対的服従があったのである。我が国においても、敗戦以前は殆どがこの通りであった。平重盛の忠とならんと欲すれば孝ならず、孝とならんと欲すれば忠ならず、というあの立場は、全くこの儒教の孝のおしえなのである。⁽¹⁹⁾

(18) 巻第三「医師問答」の中で、熊野本宮証誠殿の前に立った重盛が、「南無権現金剛童子、願はくは子孫繁栄たえずして、仕へて朝廷にまじはるべくは、入道の悪心を和げて、天下の安全を得しめ給へ。栄耀又一期をかぎって、後昆恥に及ぶべくは、重盛が運命をつづめて、来世の苦輪を助け給へ。両ヶの求願、ひとへに冥助を仰ぐ」(巻第三「医師問答」)と切に祈っている。重盛は父入道の悪逆無道を認め、その悪行がついに自分の力及ばぬものであることを認識したからこそ、現世を諦念し、来世への期待の心が生まれたのである。

(19) 道端前掲『仏教と儒教倫理—中国仏教における孝の問題』、27-28頁。

道端が述べる通り、儒教の「孝」は上下尊卑の関係にある。しかし、重盛の父清盛に対する「孝」は、父への絶対的服従かと言えば、必ずしもそうではない。後白河院幽閉は、清盛の立場からすれば後白河院は平家の恩⁽²⁰⁾に仇で報いたからこそ行った行為である。それゆえ、父の軍団に加わり、後白河院を拘束することこそが、父清盛への絶対的服従と言える。その意味で、ここでの重盛の「孝」は大きく言えば、道端のいう儒教倫理の「孝」と言っても間違いのないであろう。しかし、重盛の言動の真意が父の後白河法皇の幽閉を阻止することにあることを考慮すると、ここに重盛に体现されている「孝」は、むしろ加地伸行の言う「諫言」という行為としての「孝」ととらえられるべき部分が大きいのではないだろうか⁽²¹⁾。物語の中に描かれた重盛は、言葉と理で不忠に走る父清盛を諫め、子孫代々の繁栄を願おうとする「孝」の立場と、主君後白河院に逆らうことなく、臣としての本分を全うしようとする「忠」の立場の両方が体现されている。そして、「忠」と「孝」のどちらも捨て切れなかった重盛こそが、「忠臣孝子」のモデルとして高く評価されたのである。しかし、出家して父に先だった彼の最終選択は、この後も後白河院と衝突するであろう父への諫言を諦めたこと、予想可能な破局を見ないことにしたことを意味する。それは後白河院に対しては、不徹底な「忠」であったとも言える。そして事実上、父清盛への「孝」を優先したとも読み取ることができるのである⁽²²⁾。

(20) 平家の恩とは、保元・平治の乱以来、「代々の朝敵を平げて、四海の逆浪をしづむる」(巻第二「教訓状」)のようなことである。

(21) 前掲書『孝経』(講談社学術文庫)の中で、加地伸行は『孝経』の第十五章「諫争」について、「この章は特異である。孝と言えば、親が子に対して絶対服従を強いるようなイメージがある。しかし、『孝経』はそうとはしない。親にも過ちがあることを認め、そうした不義に対して諫言すべきであることを説く。しかも親子間の問題だけとはしないで、天子・諸侯・大夫それぞれにおいてその臣は諫言すべきとする。士の場合は、友人が諫言をすべきとする。つまり、孝は人間関係において絶対服従というような単純な意味ではないことを主張している」(141—142頁)と解説している。

(22) ただ、注意しなければならないのは、重盛の実際の行動から「孝」の優位が見られたにもかかわらず、「孝」と「忠」のどちらも捨てられない彼の気持ちの方がより鮮明に描かれていることである。武田昌憲も「平重盛 『平家物語』の孝子説話」の中で、「重盛が忠臣・孝子の印象が強いのは、父清盛の悪行に全く加担することなく、その否を理路整然と父の前で論破し、悟らせるところにある」(『アジア遊学』一一二号(特集 アジアの孝子物語) 勉誠出版、2008年、28頁)と述べている。父の不忠な行為に諫言し、それを止めさせようとしたことは、主君後白河院に対する「忠」であると同時に、武力を使わずに言葉で父清盛に諫言したその行いは、父への「孝」でもあると評価されたわけである。

1.3 まとめ

以上考察して来たように、平重盛に体现された「孝」と「忠」は主に諫言の場においてである。このことは、当時における「忠」と「孝」の在り方を考える上で示唆的だろう。例えば、『平家物語』とほぼ同時代に成立した『十訓抄』の第六「可存忠直事」の冒頭に、「ひとへに君に随ひ奉る、忠にあらず。ひとへに親に随ふ、孝にあらず。あらずふべき時あらずひ、随ふべき時随ふ、これを忠とす、これを孝とす……悪しからむことをば、必ずいさむべき」⁽²³⁾とあり、まさに『平家物語』の重盛に体现されたのと同様、「忠」と「孝」は「諫言」と密接に関わって語られている。内田滯子は論文「『十訓抄』の忠義—第六の考察から—」⁽²⁴⁾の中で、この章に収められた主従関係における忠義を記した説話の具体的検討を通して、『十訓抄』は規範となる「忠義」が、主に天皇を対象としており、しかも戦の場面と関わる「忠義」のありかたが意図的に排斥されているだろうと述べた上で、全体として、「出家」という方法に代表されるような、前時代的な、〈貴族的〉とも言える色合いを強く現していると指摘している。確かに、重盛は『平家物語』の中で、父と天皇の間に進退両難の立場に置かれた際、武力で問題を解決するのではなく、救いの道として「出家」を選んだのであった。「孝」と「忠」が相剋する場面で、武士でもある重盛のこの対応の仕方（諫言→出家）は、『十訓抄』にも示される〈貴族的〉側面を持っていたと言えるだろう。

2 「孝」の内実

重盛は平家一門の体面を思慮し、「名を揚げて、父母を顕彰する」ことを子へ教訓し、主君後白河院を軟禁しようとする父清盛に対しても、一族の繁栄を考えた上で諫言という形で応対する。こうした彼の「孝」は、儒教的要素が強いように見えるが、後に彼がとった行動には、儒教の説く「孝」と相容れない側面も見られる。出家し、父に先立って死んだからである。出家することと親に先立つということは、儒教の「孝」において大不孝とされることがらだからである。しかし、このことについて、『平家物語』では特に問題視されていない。『平家物語』を彩っ

(23) 引用は、本文は善本とされる宮内庁書陵部所蔵本（片假名本）を底本とした、『新編日本古典文学全集』（小学館、1997年）所収の浅見和彦校註・訳『十訓抄』（209頁）による。

(24) 説話文学会「編」『説話文学研究』（36）、三協社、2001年、135-146頁。

た思想は儒教だけではないからである。仏教思想の受容が、当時の人々の死生観に与えた影響の大きさは無視できないのである。これを検証するため、次に、祇王と藤原成経の場面を取り上げ、重盛の「孝」と対照させながら、「孝」の相異なる表れ方を考えてみたい。

2.1 「今生の孝養」

一度平清盛によって実家に帰された祇王が、清盛からの手紙に返事をしないことに対し、母とちが祇王を戒める話のなかに「今生後生の孝養」という言葉が出て来る。これを、『平家物語』の注釈者市古貞次は「親孝行の意と、死者のために追善供養すること、後世を弔うことの意とがあり、ここでは、両方にかけている」⁽²⁵⁾と解釈する。生前の親への孝行と、親の死後、冥福を祈って行う供養である。母とちの言葉を聞いて祇王がとった「親の命をそむかじと、泣く―又出で立ちける」という選択は、死ぬまで都に住み続けたい母とちの希望にそうためであった。祇王の行動は、『孝経』の中にいう「孝子之事親也、居則致其敬、養則致其楽、病則致其憂、喪則致其哀、祭則致其嚴」⁽²⁶⁾から説明できるものである。この『孝経』の教えは生前から死後にかけての親への「孝」を説くものである。祇王の選択は母とちの命令に反抗しない、「居則致其敬」の「孝」と、清盛に逆らいさえしなければこれからも母を穏やかに都に住ませることが出来るという「養則致其楽」の「孝」なのである。そうした点で、祇王の選択、行動は儒教的「孝」の理念に沿ったものであった。

では、母とちの言葉にある「後生の孝養」、死者の為に仏教儀礼として追善供養する行為は、『平家物語』の中でどのように儒教の「孝」思想と関わっているのだろうか。次に、藤原成経の場合から考えたい。

2.2 「後生の孝養」

藤原成経が備前児島に父の墓を訪ねる場面の一部。

康頼入道と二人、墓のまはりを行道して念仏申し、明けぬれば、あたらしう

(25) 前掲『平家物語』(①)、42頁。

(26) 前掲書『孝経』(講談社学術文庫)、74頁。

壇つき、くぎぬきせさせ、まへに仮屋づくり、七日七夜念仏申し経書いて、結願には、大きな卒兜婆をたて、「過去聖霊、出離生死、証大菩提」と書いて、年号月日の下には、「孝子成経」と書かれたれば、しづ山がつの心なきも、子に過ぎたる宝なしとて、泪をながし袖をしぼらぬはなかりけり。⁽²⁷⁾

ここでは、亡き父を敬慕し悲哀を極める成経の様子や、子の父への「孝行」の思いが人々の心を打って、「泪をながし袖をしぼらぬはなかりけり」と評されている。この成経の姿は、儒教の「孝」思想「喪則致其哀」につながるものであるが、同時に彼が行った、壇を築き柵を作り念仏し経を書くという一連の行為は、仏教儀礼としての追善供養の方式である。田中徳定は、「古代・中世日本の場合、儒教の孝思想としての祖先祭祀は、既に奈良時代から仏教儀礼として行なわれてきたものであった」⁽²⁸⁾と、儒教の孝思想と仏教儀礼との古くからの習合について述べている。儒教の「孝」思想が仏教儀礼と関わりあいながら、当時の人々の意識の中に共有されてきたのである。藤原成経の例はそのことを如実に示すものであろう。

3 「忠」の特殊性

前節では、祇王と藤原成経の例から、「出家」して父である清盛に先立って死んだ重盛の行為を、『平家物語』は「不孝」と批判しない理由について、儒教の「孝」思想が仏教儀礼との関わりから論じた。しかし、平重盛以外の武士について、『平家物語』はあまり「忠」や「孝」で語らない。その理由について、下記の2点から考えてみる。

まず、『平家物語』のテキスト全体における重盛の位置づけから考えてみたい。「忠臣・孝子」として父と応対した重盛について、『平家物語』は「[「国に諫むる臣あれば、其国必ずやすく、家に諫むる子あれば、其家必ずただし」といへり。上古にも末代にもありがたかりし大臣なり」⁽²⁹⁾と評価する。重盛は、国にとっても平家にとってもきわめて重要な存在として描かれている。確かに、重盛は、「忠

(27) 前掲『平家物語』(①)、211頁。

(28) 田中徳定『孝思想の受容と古代中世文学』新典社、2007年、25頁。

(29) 前掲『平家物語』(①)、143頁。

孝」を武器に父を説得し、それによって、父清盛と主君後白河院の関係も辛うじてバランスが保たれ、天下は安泰したのであり、平家の繁栄も維持されたのであった。しかし重盛の死後、彼のように国と父の為に諫める者、「忠」と「孝」の均衡を図る者は登場しない。そして清盛と後白河院のバランスは完全に崩れ、平家の滅亡が始まるだけではなく、国も戦争に巻き込まれて乱れていくのである。『平家物語』全体の構成から考える場合、重盛の「忠・孝」のバランスがくずれることによって平家も滅び、国家も乱れていったのである。要するに、平家の運命の預言者として平重盛が描かれ、その場合彼が用いた「孝」と「忠」の議論がどうしても不可欠なのである。

次に考えられるのは、『平家物語』では「忠」以外に、武士の別の側面が問題視されるからである。例えば、『平家物語』に、今井兼平と木曾義仲のエピソード(巻第九「木曾最期」)に見られるように、主人と最期を共にする家来の姿が描かれている。あるいは、佐藤嗣信に見られるように、主人源義経の為に命を失う家来も描かれている(巻第十一「嗣信最期」)。しかしながら、このような家来の主人に対する感情を、『平家物語』では、「忠」または「忠実」という表現では評価していない。そこでは「忠」よりも主従の間の「心の結びつき」が主題化されるからである。アレクサンダー・ベネットが指摘したように、主君の死後に自害した殉死とでも言える行為を、「忠」を示すための風習といった形を取り始めるのは、『太平記』(1370頃)以降のことである⁽³⁰⁾。後代になると、「殉死」は、主従関係における、「忠」の象徴とされるに至るが、主君の死後に自害した今井兼平の行為は、主君に「忠」を示す行為であるにもかかわらず、『平家物語』においては、未だそれに特別なことばが与えられていない。ここから「忠」の思想は、『平家物語』当時、まだ広く共有される意識ではなかったとも言えるのではないだろうか。

おわりに

以上、「孝」と「忠」が語られる文脈に基づき、平重盛について論じてきた。これによって、『平家物語』において、どのような平重盛像が語られたのか。

(30) アレクサンダー・ベネット『武士の精神とその歩み—武士道の社会思想史的考察』思文閣出版、2009年、112頁。

平重盛に見られる「孝」は、父及び平氏一族全体を対象とする。一方、「忠」の対象は、主君後白河院および天下（国家全体）である。そして、父清盛に対する「孝」と、後白河院に対する「忠」は、父と主君との対立する場面で両立し難いものとして描かれている。重盛は父を諫める場合に使用した「孝」と「忠」の議論があったからこそ、「忠臣孝子」としての彼の印象が強いのである。彼の生前における「孝」の実質は「諫言」という意味での「孝」である。そしてその後の重盛の選択と父清盛の後白河院に対する行動からは、「忠」を尽くそうと努力した重盛は、父清盛への「孝」をより優先させた姿がうかがわれる。

その中で、出家して、父に先立って死んだ彼の行為は「不孝」と批判しないのは、祇王と藤原成経についての考察からわかるように、『平家物語』には儒教思想以外に、仏教思想の受容が、当時の人々の死生観に与えた影響の大きさは無視できないからである。儒教の「孝」思想が仏教と関わり合いながら、当時の人々の意識の中に共有されていたことが伺えよう。一方、「忠」の思想は、上層部の貴族以外に、まだ広く共有されていない、いわば儒教的知識としての受容が強かったことが窺われる。

以上をまとめると、『平家物語』では、平重盛が登場する場面において「孝」と「忠」がよく語られている。それが、後世の生々しい戦の場面においてではなく、いわば武器を用いない＝言葉による戦いの場面で主張されたのは、その語られ方の特徴である。「孝」と「忠」は、重盛の「諫言」においてその威力を発揮し、物語の主題・構想に影響を及ぼす大事な要素となった。平重盛は『平家物語』の中で、「孝」と「忠」によって、極めて特別、かつ「理想的な武士像」として描き出されていたのである。一方、忘れてはならないのは、こうした理想的な武士像として描かれた平重盛は、また仏教信仰が強い人でもあることである。これについては、本稿の考察の中の、仏教の知識を用いて父清盛に教訓した場面などからも説明できるが、また稿を改めて論じたい。

[付記] 本稿は天津市2018年度哲学社会科学企画項目「日本中世文学里的武士形象研究」(項目番号:TJWWQN18-002)及び2019年度中央高校基本科研業務費専項資金「平家物語里的武士形象研究」(項目番号:63192229)の研究成果の一部である。